

比叡山焼き討ち

元亀二年（一五七二）九月一二日、信

長の軍勢は坂本に上陸。延暦寺に対する攻撃を開始します。「比叡山焼き討ち」

です。ここに至る経緯を見てみましょう。元亀元年（一五七〇）姉川合戦で織田信長は浅井・朝倉連合軍に一応の勝利を納めますが、その勢力を完全に押さえることはできませんでした。事

実、そのわずか三ヶ月後には浅井・朝倉連合軍は湖西から南進し、比叡山中に籠もり、信長に対して優位に戦います。この時、信長は、延暦寺に対して協力を要請しますが、黙殺され、仕方



無動寺谷

なく正親町天皇等の斡旋により一応停戦を実現させます。一般には、この時の延暦寺の対応に対する仕返しのために焼き討ちを行ったとされます。

ただ、当時の延暦寺は宗教上の勢力

のみならず、近江、美濃に広大な荘園を持つ荘園領主でもあり、これを排除

することが信長の領国支配上不可欠であつたことは事実です。この焼き討ち

に関して、どの程度の戦闘が行われたのかに関しても不明の部分が多くあります。

『信長公記』には、「九月十二

日、叡山を取り詰め、・・・山下の男女老若、・・・かちはだしにて、八王

子山に逃げ上り、社内に逃げ籠もある・・・」

とあります。信長軍の攻撃は、坂本の里坊に対して集中して行われ、ここに住んでいた人達を、八王子山や、日吉

神社の境内に追い込んだ様子がここからは読みとれます。ただ、延暦寺の象徴である根本中堂を始めとする主要な堂舎はこの時に焼かれたことは間違いない有りません。

しかし、これまでに、部分的にわ

mの広大な範囲で広がる、比良山中最大の遺跡です。遺跡は、寺院跡、坊跡、館跡など大きく四つのブロックに分かれます。このうち、ここで紹介するのは、館跡などにある庭園の遺構です。館跡は、要所に石垣を用い、その入口には耕形虎口が配されます。虎口より入ると広い平坦地があり、その北奥に庭園の遺構が遺ります。

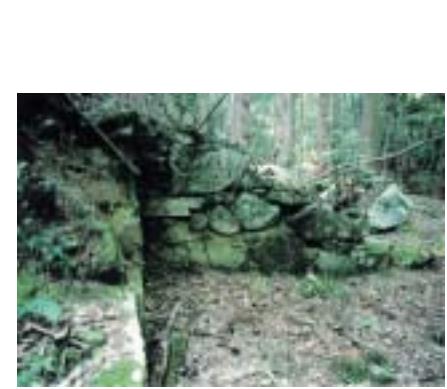
庭園はほぼ完全な形で残つており、北西奥に築山を築き、ここに三尊石風の景石を置き、裾から滝を落とします。滝の流れは、麓の小島を浮かべた池に至り、ここから下の屋敷地へ流れ出ます。現在池に水はありませんが、往時は流水の庭であったと想像されます。



庭園遺構

この庭は、中世末の典型的な武家の庭の様式を示しています。この時代の庭は、鑑賞のためのものではなく、式三献と呼ばれる、武家の主従関係を確認する儀礼の場の舞台装置として造られました。この遺跡の場合にも、庭の前面には儀礼を行つたための主殿が建てられていましたと考えられます。

ダングダ坊遺跡は、比良川がY字形に支流を集める出会い橋の北側、出会い小屋の背後に幅約一五〇m、奥行き約五五〇比良山七百坊」（淡海温故録）と表現しています。



屋敷の虎口



日吉神社の神体山「八王子山」

れた、延暦寺境内での発掘調査では、境内から大規模な火災の痕跡は見つからず、一六世紀後半の建物の跡もそれほど多くは見つかっていません。

信長の攻撃により、延暦寺が大きな痛手を受けたことは事実でしょうが、全山を焼き尽くすような戦闘が行われたかどうかに関しては、発掘調査による客観的な事實を積み重ねて判断してゆく必要があります。